子ども達が本を手にするまでに

―全面発達を促す指導・訓練の上に立った学習指導と心情を育てる読み聞かせ―

足利市立山辺小学校　和田　雅江

はじめに

筋ジストロフィーと精神薄弱の重複障害をもつN児を担任した時，障害が進行していく状況をみながら，何か生活に楽しみを与えるものを探してやりたい，と切実に思ったものである。せめて本を読む楽しみを持てたなら，とも考えたが，N児には果たしてやることができなかった。

今，学級の子ども達が，少しずつ本の楽しさを知りはじめてくれている。帰宅時，「本を借りていっていいですか。」と言っては，絵本を借りていくようになったのである。絵だけを見てくる子，ただただ字を追って読んでくる子，それぞれで，まだ本当に本を楽しむ段階までは至っていない。が，こうして本を手にとってくれるようになったのは，喜ばしいことだ。もっともっと，本を読む楽しさを伝えたい，生活に潤いを持たせるような楽しみを持って欲しい，と思う。それはこれからの課題であるが，この機に，この子らが本を手にするまでの過程を振返ってみたい。ことさら読書指導を取り上げてきたわけではないので，詳細な考察はできないが，絵本を読むようになるきっかけになったと思われる読み聞かせについてまとめ，読む事の基礎づくりとしての国語学習の指導を，M児の例を取り上げ概観したい。さらに，それらの学習の背景となったと考えられる本校のジョギング指導や，手先きの訓練について，述べることにしたい。

I　読み聞かせにより，本の楽しさを伝えることのこころみ

本を読む，絵を見る，―こんな事が書いてあった，こんな絵があった―，そういう楽しさを，伝えたい，本を読んであげたい，と，思ったが，話しことばの聞き取りが充分にできなかったり語いが少なく，理解力の低い子ども達に，わかるだろうかという懸念と，子ども達をひきつける読みができるか，という自信のなさとで，躊躇していた。実際はじめてみると，集中できる者もあれば，ちらっと見てあらぬ方を向いている者もある。が，思っていたより，大丈夫そうである。そうであれば，くり返し経験させたい。子ども達をひきつけてくれそうな絵のある本で，文字の少ない本を選ぶ事にして，読み聞かせをはじめた。文字のない，絵だけの本もあった。そういう時は，子ども達と会話を楽しみながら見ていく。意外に広がりがあっておもしろい。反応のよかったもの，内容的におもしろいものは，何度も取り上げ読むことにする。一度目よりは，二度目三度目と，子ども達と本との距離が縮まっていくようだ。

本を読む場面の設定や，ふんいきづくりもできていないし，情緒豊かな扱い方もできない，担任の心のまずしさが，まず，さらけだされるような思いがする。そんな未熟な，読み聞かせであるが，「あの本読んで」，「きょうは本を読んでよ。」ということばが聞かれるようになった。子ども達は，生来的に本の世界を楽しむ素地を持っているようだ。だが，積極的に与えなかったら本好きになる機縁を持たないかもしれない。

1. 読み聞かせの実際

今までに読み聞かせした本の中から，印象深かった数冊を以下に取りあげてみたい。

①「ムッシュ・ムニエルをごしょうかいします」　（ささきまき・福音館）

福音館発行のこどものとも中の一冊である。ムッシュ・ムニエルという名のやぎの魔術師が，弟子を探しに来て失敗をする，という話だが，話の内容より，「ムッシュ・ムニエル」ということばの響きが，子ども達には新鮮で，おもしろかったようである。読み聞かせの後「ムッシュ・ムニエル」と，口々に言っていた。また魔術師ということや，まじないで瓶をおかしな形にかえてしまうことも，関心をひいたようだ。この本は何度も読んだ。

②「ウォーレスはどこに」　（ヒラリーナイト・講談社）

ウォーレスという名の好奇心旺盛なオランウータンが，動物園をぬけだしては，デパート，公園，サーカス，博物館等と出かけて行ってしまう。人ごみにまぎれてしまったウォーレスを，探しだすという話。見開きページの絵の中から，誰が早くみつけるか，あれか，これかと探しだすのが，子ども達の気にいった様子。何度もリクエストのあった本である。どこでウォーレスを区別するかさえもわかっていないようなのだが，何度でも来ては，絵を指さしていく。残念ながら，この子達には少し困難な絵探しではあったのだ。それでも，「正解は」と，次ページを開いていく時，自分が当るかどうかの思いで待つスリルは，たまらないという様子だった。この本などは，比較的理解力のあるK児がいたことが，皆をまきこむ原動力となったと思われる。

これらの子ども達の手ごたえに，励まされ，勇気づけられる思いがした。

③「１０人のゆかいなひっこし」　（安野光雅・童話屋）

１０人の子ども達が，住んでいる家から，もう一方の家へ一人ずつひっこしていく話である。はじめに説明の文があるほかは，文字のない絵本で，表からも，裏からも見ていくことができる。数の理解（１０の数の構成）をもねらった絵本なのだが，その段階まで達していない者の多い学級なので，話としてのおもしろさと，絵の楽しさを味わうことをねらった。

「トントン，だれかいますか。」と，とびらをたたいて話を始める。こども達が答える。「だれかいるかな。」と，ページをめくる。「いたいた，何人かな。」，口々に答える。一人，二人，と指さして数える。また，「トントン，何人いますか。」と続ける。「こんどは何人だ。」と，あてっこしていく楽しさがある。安野氏特有の細かな表現が，さらに楽しさを広げてくれる。「おふろだ．はだかんぼだ。」「時計があるよ。」，「電話してる。」，「あんなとこにいるよ。」，「あーあ，誰もいなくなっちゃった。」と，誰もかれも話したくなるようだ。
切り抜かれた窓があったりもして，家の中が見えたり，子どもが見えたりする。窓から見えている子だけ数え，開いてみると．「まだいた！」と発見がある。

まだまだ，いろいろな楽しみ方のできそうな本である。

④「星のひとみ」　（トペリウス原作・小学館世界名作童話全集）

これは，最近読み聞かせしたもので，子ども達の反応が印象的だった一冊である。

赤ちゃんの時，雪の中で，そりから落ち両親とはぐれてしまった女の子が，その時浴びた星の光によって，ふしぎな力と光るひとみを持った子どもになり，「星のひとみ」と呼ばれる。拾い育てられた家で，その不思議な力を気味悪がられ，また捨てられてしまう話。

読み終わった時，Kが「きれいだったねえ。」と言うと，Tが「こわかったあ。」と言った。Kは絵を見ていて，また，雪げしきや星の光を想像しての感想なのだろう。Tのことばには，地下室にとじこめられたり，捨てられたりした女の子の気持ちになったような響きがあった。読み終わった時，思わず，感想がもれる，という事は，今までにあまりなかった事である。ことに，内容に触れ，自分のことばで表現した感想というのは，初めてといってもよい。絵本というより，物語で，少し長い作品である。それを集中してひきつけられていた事が窺われる。また，聞き取り理解する力がついてきたとも思われる。

こういう学級でも，読み聞かせを続けていける，という確かな手ごたえを感じさせてくれる体験であった。

この4冊のような，お話の本のほか，虫や，動物の科学絵本も人気があり，何度も読まされる。振返ってみると，「星のひとみ」でのK児やT児のような反応を得るまでには，ずいぶんと時間を要した。K児やT児と同じ位，内容は聞き取っていると思われるのだが，自分のことばで表現のできないM児，部分的にしか，つかみ取れないS児やE児らも，その子なりの受けとめ方をしているのであろう。それを堀り起こすことも，今後の課題である。

2. 読み聞かせの実際による考察

心情を育てる，聞き取りの理解力をつける，本の楽しさを伝える等，読み聞かせから得られるものは大きい。子ども達をひきつける，楽しいおもしろい絵のある本，遊びのある本，ことばのおもしろさのある本等が，はいりこみやすいようである。また，同じ本をあきるまでくり返し読んでやる事も，子ども達をその本の世界にひきこんでいく一つの方法のようであった。そして，どんな話だったか，おもしろかったか，等の質問はけしてしない，読後の余韻をそれぞれに，味あわさせることも，大切と思われた。

本学級では，子ども達を本にひきつけるのに，ただ本の持つ要素だけでなく，K児の存在が，もう一つの要素としてあったと思われる。理解力があり，表現力もある，本やお話の好きなKの言動で，ずいぶん活発な場面も生まれたのである。

K児は，1年の3学期に入級，現在2年である。行動が粗暴，情緒の安定に欠き，教室を常に飛びだしており，学習も進まないという事で入級してきた。教室外を徘徊する，他クラスでいたずらをしてくる，教室内でも気ままな行動をし，席にはおちついていられない，乱暴しては誰かを泣かす，という状態だったが，不思議に本やお話の時は，集中して聞いている子であった。

入級直後の読み聞かせの時の記録に，その様子が窺える。

「ちびくろさんぼの本を読んだ。途中でチャイムがなってしまう。皆，よく聞いているようなので，終わりまで続ける。読み終わって休み時間を告げるが，Kは，しばし，茫然としている。余韻を確かめているかのようである。」

入級後1年の間に，おちつきがみられ，学習にも取りくめるようになった。思えばこの頃は，じっと何かに耳を傾ける事などない，ゆっくり話を聞かせてもらう経験等なかったK児だったからこそ，こんな状態が生まれたのだろう。こういう反応を示したKのためにも，読み聞かせを積極的に取り入れようと，考えたのである。

Ⅱ 読むこと・M児の事例　　－国語学習の指導事例－

読み聞かせ等で本への関心をひきだすことはできたが，事柄をとらえる力や，文字を読む力があれば，本を自分のものとして，より楽しむことができるであろう。

ことばをはじめ諸機能の遅れを持つ上に，経験からの学習も不充分なこの子ども達にとって，文字を読み，さらに文章を読んで理解ができるまでになるのは容易ではない。物や形を見分ける弁別の学習からはじまり，五十音の弁別，ことばとしての文字の読み，文の読み，そして文章へと学習を積まねばならない。本学級５名のうち，よく本を借りていく３名は，学年は異なるが共に，一年の下巻の国語教科書まで学習が進んでいる者である。本を選んでくると，すぐに読みはじめる。読めるということに自信をもって，喜こんでいるようにみえる。

この子らは読むことをどのように学習してきたか。個々人により違いはあるが，M児について国語学習の指導の一例として概観したい。

1. M児の実態

M児は１年の２学期に入級，現在３年である。幼児期よりことばの教室に通級（現在も継続）しており，入学時に入級対象となったが両親は通常の学級を望んだ。１学期を通常学級ですごしたが，２学期に入り登校を拒むようになったため，両親も入級を決意した。

入級当時のM児：身辺自立はしており，性格は明るくまじめ。情緒も安定しており学級生活に，すぐなじんだ。少しおどおどした所があり，遊びの時は大声を出すが学習中は小さい声と，自信のなさが窺われた。構音障害がありことばは聞きとりにくい。語いも貧しく，文字の読み書き不可。自分の名前の文字を弁別できるようになったところ。数は１０まで唱えられるが，１対１対応はできない。絵を描くと，画用紙の中ほどに小さな丸をいくつか描くのみで形にならない。運動能力に局端な遅れはないが，機敏さがない。課題に取りくむ姿勢があるが，聞き取りが不充分で，時に課題を理解できない事がある。

学級への適応はスムーズにいき，課題に関心を持てるので，比較的容易に学習に入れた。

2. 指導過程

M児の場合，ことばの教室での指導効果も大きい。が，ここでは学級での指導のみ記録する。

① 弁別学習から文字の読みへ

- 物の形，線分，細部の異なる図形等の弁別力を高め文字の弁別力を養なう。
  - ・形合わせ．絵カードの分類　（同じ物をみつけあわせる）
  - ・線の弁別，模写　（／，V，┐，＋，等の線分のカードを使用）
  - ・絵カードと文字カードのマッチング

    学習段階の近い者と組ませ，ゲーム的な要素も入れ楽しくできるよう留意した。
- 文字への関心，興味をひきだす。
  - ・「あいうえおのほん」を見せながら読み聞かせをする。読みの模倣をさせる。

② 五十音の読みからことばの読みへ

- 五十音の読みを確実にし，さらに文字の集まりがことばとしての意味を持つ事に気付かせことばの読みができるようにする。

・絵カードと文字カードのマッチング

・ことばの音節分け（「とり」という文字をみたり，絵をみたりして，「とり」と言いながら○○と手を打たせ，一音一文字を確認させる。）

・友達の名前の文字を覚える。（見分ける）

・「あいうえおのほん」からことばを拾い出し，文字を示しながら読みの模倣をさせる。

・文字のなぞり書き，模写（薄紙をのせてなぞる，見て書く等）

③　文を読むことから文章の読みへ

○☆印の教科書を使用して文の読みに慣れさせる。

・短文の読みを，模倣からはいり反復練習。さし絵を手がかりに意味をとらえさせる。

・読みのできた後，薄紙をのせ模写させる。

※読みが確実にできたら印を押す。（ページごとに）他児もこの方法をとっているため，自分もという意欲づけになる。

※この頃より生活ノートに１日のでき事を短文にして書く。

○文章を読む力をつけるため，１年上（通常学級使用の物）の教科書に進む。

・☆印教科書同様の方法で，読みの反復練習をさせる。

・単元によっては，紙芝居を作成（コピー）練習の後，皆の前で発表させる。

・短文や詩の暗唱をさせる。

・漢字，はじめて出会うことば等は，取り出し練習，（読み，書き）

※同様の方法で，現在１年下に進んでいる。

参考：　M児の各分野における変容

指導過程	学期	話す	聞く	読む	書く
①形弁別から文字弁別へ	1年・2		簡単な指示の理解ができる。 絵を見て話を聞く事に関心が持てる。	文字弁別ができない。	名前の文字を書ける。 線分の模写ができる。
②五十音の読みからことばの読みへ	3	ことばが不明瞭だが話そうとする。		五十音中20字位読める。 単語の音節分けができる。	友達の名前を書く。 文字の模写をする。
	2年1	サ行→タ行，ハ行→ア行の誤まりあるが会話ができる。	指示の聞き取りが不充分な事がある。	看板，本などから文字の拾い読みを盛んにする	
③文を読む	2		サ行→タ行，ハ行→ア行の誤まりが聞きとりにもある。	簡単な文の音読ができ，意味もとらえられる。	五十音がほぼ書ける。 短文を書く。

文章を読む	3	「大きいのくつ」のような助詞の使い方の誤まりがみられる。		簡単な文の暗唱をする。 音読に慣れてきたハ行→ア行，サ行→タ行の誤まりが読みにもある。	脱字が多いが主述のある文を書く。 発語の誤まりどうりの表記の誤まりがある。
	3年1	語いが豊かになり話題もふえる	放送等の聞き取りはよくできない。	音読が確実になりカタカナ，漢字の読みにも慣れる。	三語文程度であるが短い作文を書く。
	2	話のすじが通るようになった。		サ行の読み確実に。 文章を読み，内容の理解ができる。	100字程度の文を書くようになった。

3. まとめ

文字指導の段階からというのは初めての経験であり，見通しを持って計画的に進めてきたわけではないので，不十分，不適切な面が多々あった。M児の場合，物や形，線分等の弁別力があり模写もできる段階であったので，導入がスムーズだった。文字が読めるようになると，積極的に拾い読みするなど意欲的だったので，動機付けの苦労も少なかった。しいて言えば，他児の本読みする姿が，さらに意欲を持たせるものとなったと思われる。

読み聞かせにより，聞き取りの力が高められた事や，書きことばの修得により認識を深めていった事等が，読む力へも逆に影響を及ぼしていると考えられる。また，M児の場合構音の障害が，すべての面に表われ，ブレーキになっているが，文字を修得する事によって，この誤まりが是正されていく事もみられた。

現在，1年下巻を使用しているが，新単元に入る時も，自分で読みを進められ，スムースな音読ができるようになってきている。

書きことばも，話す，読む等を一層確実にするために重要である。以下に書きことばの中でのM児の変容を，毎日書く生活ノートの中からみて，まとめに代えたい。

- 入級から5ヶ月ほどは，書きたい事を言いながらでたらめ字を書いていた。
- 1年3学期末頃，覚えた友達の名前を毎日書く。
- （2年2学期12月）　げきのおはっぴょうかいでした。おとりをやりました。
- （2年3学期2月）　さとしくんがやすみをしました。けんかをしました。なきました。
- （3年1学期6月）　まらそんにまけました。たいいくをしました。とぶにしらながたか（どぶに，しらなかったから）みないてあしてたら（はしって）なきました。すすいたがるれました（くつした）（ぬ）。すみたかたです（つめたかった）。いたかたです。すすいたがまくろになっていました（まっくろ）。けがおしました。

Ⅲ 学習に取りくめる子を育てる能力開発のこころみ

単調な音読の反復練習を意欲を持って進められる，絵本を積極的に読もうとする，そういった事ができるようになるための，欠く事のできない背景として，本学級では，ジョギングや，手先き，足腰の訓練がある。

やる気を持つ，課題に関心が持てる，集中して物事に取り組める，という事が養われて始めて学習が成り立つ。また，充分な身体の発達や体力の充実，協応運動などの感覚運動の能力の発達も，学習のレディネスとして重要である。それらを養い，促進してくれるものとして，意識的，意図的に，これらの指導・訓練を取り入れてきた。

1. ジョギングについて

(1) 指導の過程でみられる子ども達の変容

夏のプール使用の期間を除いて一年中，学級の朝の日課はジョギングで始まる。現在は学校に隣接するいこいの森の中に設定したコースを使用しているが，以前は校庭を走った。いこいの森の山道コースは，起伏があり，遊具に気をとられる心配もなく，四季の自然も楽しめ，校庭のコースより条件が良いようである。短いコースだが5～10週するのはなかなかたいへんで，大人でも長期の休みのあとなど呼吸が苦しくなり，登り坂のきつさを感じる。

「ジョギングで走れるようになった頃，ちょうどいろいろな変化が出てくる。」と，担任の間でよく話題に登る。途中で遊具にひっかかる，勢いよく飛びだしたもののすぐ歩きだす，泣きだす，などせずに，遅くても一定のペースで，休まず走れるようになるまでには，どの子も時間がかかる。この，走れるようになった時が，生活面や学習面に変化のみられる時と，不思議に一致するのである。

前出のK児の場合を例にとってみよう。「Kがもし走れるようになったら，変わるだろうな。」「だけどKは走れるだろうか。」，入級前のK児を見て，話した事である。片時もじっとしていられず，地面の上をまるで犬や猫がするようにころげ回る，好き勝手に飛び出しては山の中まで行ってしまうKであった。ジョギングに参加して，初めのうちは，体操着に着換えず，体操中もおちついていられない，スタート共に飛び出して行くが必ず途中でコースからはずれる，追いかければ逃げるといった風でとりつくしまもない。見失なわずにいるのが精一杯だった。今は卒業してしまった子達が5周のタイムトライヤルをしていた頃だったので，走り終わると全員のタイムを記録した。この時間を測るという事に，最初に関心を示した。スピードをあげたり，歩くようになったり，ペースが一定しないが，ともかくも走るようになってきた。先輩達や担任がついて走るようにする，担任と競争する等するうちに，次第に完走の日が増した。そして，2ヶ月位でほぼ1人で完走するようになったのである。

学習時間中にも，トランポリンや積木で遊んでいたり，教室を抜け出して徘徊してきたりであったのが，減少しはじめ，学習に参加する日がみられるようになってきた。休むひまなくだった友達への乱暴も減り，かえって仲間はずれにされたと泣くようになった，必ず姿を消していた清掃時間に雑巾を持つようになった等，生活面にも変化がでてきたのである。

現在入級後1年になるが，もともと能力は高い方なので，誰よりも速く走るようになった。走

りながら，仲間にチョッカイを出したり，多少のずるをしたり等，残された問題もあるが，もう目を離しても，完走してくれる。

おちついてきたK児に，「Kちゃんかわいくなったね。いい子になったよ。」と，学級内でいじめられてきたS児が言う。

M児のように安定した子どもでも，学習中気が散りやすい，ボーッとしている事がある等問題点があったが，走り通せるようになった頃から集中力，持続力が増してきた事が認められ，1人での学習ができるようになった。

(2) ジョギングの効用

① 走る事が体力づくりに関与する。

比較的体力のない子が多いのだが，風邪から長期の休みになる等という事が減少し，欠席する程の事もなく治してしまう場合が多くなった。1年間以上続けた者にその傾向がみられる。加えて，統制のとれた運動や動きができるようになってくる。走るという全身運動がもたらす効果であろうし，また走ることが運動能力の発達を促進していると思われる。

T児は入級当時，走り方や歩き方のバランスの悪さがめだった。手足がバラバラに動いているのかと見えるくらいもたついて，腰が安定していない。ジョギングでも，本人は走っているつもりなのだろうが，前に進んでいない，後にもどる時もあるという不思議な走り方をする。体操等はふざけているとしか思えない程，ヨロヨロして手も脚もまっすぐ伸びない。本人は真剣なので注意を受けると心外という顔をする。仮死分娩で生まれた事やその後の発達の遅れに原因があると思われた。

このT児も今では走りが安定し，起伏のある山道を走れるようになった。それと共に動きの統制がとれるようになり，以前のような歩き方走り方でなくなってきている。体力が充実してきた事も良い結果に結びついていると考えられる。

② 長く走ることで集中力や持続力がつく。

走り慣れないうちは，誰でもが合図と共に短距離走のように飛び出す。すぐに息を切らしてアゴを出す。そういう時，この子ども達は，再び力強く走り出そうとしない。走り続けよう，もっと速く走ろうというめあてを持って気持ちでひきあげる事ができないのである。校庭5周を，休まず一定のペースで，より速く走るには，心の働きが重大にかかわってくる。こうして，走る事を身につけていくうちに，集中力や持続力が育てられる。そして耐える心も。

走れるようになった子ども達は皆，個別学習で自分の課題達成のための1人学習を続ける力を持つ。劇の練習を短時間でやりとげる事等も，集中力が養なわれている事の表われと思う。

③ 目標を持ち，判断をしながら走る事で，意志の働きを促す。

この子らと走っていて気付く事に，意志の働きの弱さがある。「きょうは○○ちゃんを抜くよ」「△周走るよ。」と言って走り出しても，その気がなくなったかとみえるくらい，抜かれても平気マイペースである。下りから上りにかかる所で急にスピードダウンするT児に，「ここでがまん」と声をかけて走ってみた。一週間もすると，その場所の走り方がのみこめたようである。前の人にようやく追いついたかと思うと，抜こうともせず後を走るS児，「抜いていいよ」と声をかけ

ると抜いて行く。こういう事を自分の判断で，自分の心の働きで少しずつできるようになっていく。また，5周走り終わったという事がつかめない。カードをわたす方法をとったりもした。今では，指折り数えたり，周ごとに大声で数えたりしてわかるようになった者が増えている。

1年中走っていると条件のよい日ばかりとは限らない。校庭の状態が悪いとコースも変わる。いつもと違う所を走るには，知的な判断力が必要だ。つい，いつもの習慣通りに行くとぬかるみにはまってしまう。

こうして，目の前の事柄に対して，一つ一つ判断し，適切な行動をとっていかねばならない。考えながら運動をする事が，意志の働きを促すようになる。これも大事な事と思う。

④ 耐える心を育てる。

暑い日，寒い日，疲れている日，気が乗らない日，1年のうちにはいろいろな日がある。どんな日でも同じように走る。寒くて手がかじかんで泣いた子も，どんな寒さの中でも泣かずに走れるようになる。そして，身体の中からあたたかくなることを知る。そうしてがまんのできる子どもになってくる。ふだんから，ちょっとした事で泣いていたT児が，涙をこらえられる子になった。今，「がまんできる」という事が再認識されている。

ジョギングの中で得られたと考えている4点を列記した。私達のこの考えを裏付けてくれる著書に出会ったので，下記に関連すると思われる事項をぬきだしてみたい。

久保田競著　「脳の発達とこどものからだ」より。

「健全な精神は健全な肉体に宿る」というラテン語のことわざがあります。

感覚運動的知能の教育を行なうにしても，肉体が丈夫でなければなりません。体力がなければなりません。筋肉を使うには酸素が必要で，筋肉に必要な酸素を送りこめる心臓血管系が必要です。汗が出るくらいにはやく歩いたり，走ったりする事も大切だと思います。

― 中略 ―　持続的に体を動かし続ける訓練を子どもにつけることも大切だと，私は思っています。このことは積極性を育てたり，注意の集中力をつけるのにも役立ちます。

健全な肉体と健全な精神とは車の両輪のようにつながったものです。肉体をよくすることが，脳をよくすることです。

2. 手先きの訓練について

走る事の効果等を考えていくうちに，脳の働きとの関連について学んだ。そして手先きの訓練も大切である事を知った。そうして取り上げたのが，手をより器用に働かせるための，三つ編みや針仕事である。が，本学級では，そういう事を知る以前から手先きの訓練を行なってきていた。包丁を使う事や雑巾しぼり等手の労働がそれである。最近失なわれつつある手の労働を，大切な物として，学級主任がジョギングと共に取りあげていたのである。

不器用になった子ども達の手に器用さを取りもどす事，働く経験をさせること，そして目と手の共応動作，両手の協応動作等の感覚的運動の発達を促す事が手先きの訓練のねらいとなる。

本学級では，これに足腰の訓練となる内容も加えて実施した。

(1) 手先き，足腰の訓練の実際

現在までにとりあげた手先き及び足腰の訓練を列記する。

① 雑巾しぼりと雑巾がけ（はだし）

雑巾をたたみ，両手で握って左右の手首を反対方向に回転させて雑巾をしぼる。これができない子どもが多い。風呂で使ったタオルをしぼる事もしていないのではないかと思える。

手首の働きと同時に指に力をこめるという機能も養なわれる。意外に力を出せない子がいる。

雑巾がけは両手指を開いて雑巾をしっかり押え，押していく。押えができないと雑巾が丸まって押しにくくなる。足指の付根で床を蹴って押していく事も重要である。これは歩行の時の足の動きとも関連する。足の訓練の1つである。

② パンくずし

乾燥させたパンを台にのせ，木づちでたたいてくずす。手首のスナップをきかせねらいを定めてたたかないとよくくずれない。おもしろさも手伝って熱心にやれる作業。

③ パン切り

パンを包丁でさいの目に切る。この作業を始めた頃は，指を切る者があったそうだが，見よう見まねというのか，あとから始めた者は，先輩に教えられながら，けがもせず切る事ができた。これらのパンはプールの鯉のえさにするので，目的があり見通しを持った作業ができる。

目と手の協応動作の訓練になる。

④ 料　理

カレーライス，たけのこごはん，けんちん汁等を今までに手がけた。材料の買い出しに始まり皮をむく，切る，いためる，煮る，盛りつける等作業種類が多く，子どもの能力に応じて作業種を選ぶ事ができる。切る事も，皮をむく事も材料や料理によって異なる，里いもの皮むきなどむずかしい作業もあった。1つ1つ考え，判断し，注意力を働かせて作業しなければならない。上手に，きれいにという工夫もする。こういう頭を使いながらの作業が，集中力や意志の働きを育てる。こども達も担任も緊張するが結果がうれしい仕事である。

⑤ おはじきとお手玉遊び

細かな指先きの動き，手を返したりそらせたりする動き，つかむ，握るなど，手の機能を充分に発揮させなければならない。同時に目と手の協応動作と，すばやい動き，判断力が養なわれる。能力の高い方の子ども達にもむずかしかった。

⑥ ハイハイ運動

これは手先きというより，全身の機能発達を促す運動である。

うつ伏せに寝た状態から腹をつけたまま，腕でひきあげ，足指の付根で（親指）蹴って前へ進む。胴体をくねらすようにする。一往復もすれば身体の中から暖かくなってくる。普通のハイハイのように右手，左脚，左手，右脚と動かすのではなく，右手，右脚，左手，左脚と動かすハ虫類の四つ這いというのをやる。これは全身の発達と大脳の活性化を促す。

⑦ さしこ等の針仕事

親指と人さし指で細い小さな針を持つ，両手の協応動作で布を動かし針を進める，縫っていく先を見通す，できあがりの美しさ，ていねいさが求められる，などがあり，多くの能力を必要と

する。雑巾を縫うことから始めたが，最初の作品は名実共に汗と涙の結晶だった。

これを包丁の使用と同じように，あとから入級した子ども達は，不思議な事に先輩達ほどの苦労を知らずに，できるようになった。

⑧　三つ編み

3本のひもを自由に操り三つ編みをする事は，今までの作業の中でもむずかしい物の1つである。1人で編める者は少ない。両手の協応動作と共に，ひとつひとつの手の動きの意味を理解して，見通しをもてなければできないからである。2本の手で3本のひもを扱う事は困難な事なのだ。パターンをのみこめた者には，楽で楽しい作業なのだが，支えがうまくできないとよれてしまったりもする。

⑨　なわより

これもむずかしい仕事である。大人でも幼ない頃から経験してきた人と未経験の人とで大きな差がでる。わらを使う事はできなかったので，布をさいたひもを使用した。手の平の感覚と器用な動きが要求される。

⑩　おにぎり

手の平にのせたごはんを，回転させながらほどよい力でにぎる。握っているうちにつぶれたりバラバラになったりする。形ができてもしっかり握れていない事もある。ごはんの扱い方がむずかしかったようで，楽しみな作業なのだがなかなかこなせない。

⑪　ナイフの使用

鉛筆や木を削る。包丁以上に危険な刃物で扱いもむずかしい。可能と思われる子ども達に与えた作業だが，両手をうまく協応させ，ナイフをなめらかに動かし，きれいに削る事は練習を重ねなければできない。

(2)　手先き及び足腰の訓練についての考察

思えば，これらの作業はもう少し前なら，家庭生活の中で身につけてきた事である。祖父母参観日にさしこを見たおばあちゃんが，「昔はみんな家でやったもんだけど，今は学校で教えてくれるんだねえ。」と語っていた。

ちえ遅れの子どものみならず，健常児の不器用さが指摘されている今日である。そして皮肉な事に，最近，手を働かせる事が脳の働きと関わりがあり，人間らしい機能を発達させていくには手を充分に使う事が必要だという事が解明されてきているのである。

脳が充分に機能しているかは，手の動きを見ればわかるのだそうである，大きい動きから細かな動きまで，手が器用に働くよう，経験を積ませたいものである。手の労働は，やりとげた後に残される物が喜こびになる。子ども達は作業そのものも好きで熱心である。さらに，ていねいにやろうとか，作業の先を見通すとか，頭を使いながらでないとよい仕上がりが得られない。この事がより人間らしい手の使い方ができるため大切な事である。

手を使う事が人間としての機能を最大限に発揮してくれるわけであるし，同時に人間の持つべき人間らしい能力を育ててくれる。子どもの育つ過程で忘れてはならない事と思う。

おわりに

本を毎日借りていくようになってしばらくした時，S児が生活ノートに本の事を書いてきた。「こいぬがうまれたよをよみました。どこがおもしろかったというと，ほんをよんだことです。またよみたいです。」というものだった。「どこがおもしろかったか」という事を書こうとしたS児が，うれしかった。さっそく皆の前で読んでやる。それがはげみとなったのか，それからも本の事を書いてくる。最近では，本の絵について「なおこがこうえんであそんでいるところです。」という調子で書いてきたり，話を写してきたりしている。脱字の多いS児の文の中に，本を読み感想をもち，表現しようとする心が育ってきている事が窺われる。

ジョギングや手先き，足腰の訓練に加え，日常生活の様々な場面での生活指導等を通して，子ども達の全面発達を促す，という事が私達の考えである。そうして体力を持った，やる気のある課題に関心の持てる，集中力，持続力のある子どもになった時，学習への導入はより容易になる。学習に取りくみ，課題を達成できた時，子ども達は成就感と満足感とを持つ。自分に自信を持てるようになる。それは新しい課題へのスタート台に立てた事でもある。そんな風に子ども達が育っていってくれたらと願う。さらに，得た知識や技能を元に，生活に楽しみを与えてくれる物をも得られたらすばらしい。

これは願望である。こう大上段にかまえられるほどの事は成し得ていない。

この記録は，日々子ども達とかかわり合う中で，考えさせられ，教えられ，気付かされてきた事のまとめに過ぎない。地味な日々の拙い実践の記録である。

教育に大脳うんぬんなど，取り上げる必要はないということばを聞く事もある。そうかもしれない。が，人間をより深く知った上ではじまる教育もあると思う。今，人間に関する生理学的な研究が，我々に多くの示唆を与えてくれる。

しかしながら，科学的研究が解明してくれる事実と充分に重なる教育の実践を，研究の発表で学ぶより以前に，子どもとのかかわりの中で見いだして，ごく自然に行なっている先輩教諭達がいる。山辺小の多くのそういった先輩達に学ばせていただいている。

評

精神薄弱特殊学級で，日ごろこつこつと確かな教育活動を続けている筆者の実践記録です。ちえ遅れの子供，ダブルハンディを負う子供と真剣に取り組む筆者の姿が記録の中にうかがわれます。

子供たちとのかかわりの中で具体的に子供を見つめ，発見し，考え，一人ひとりの子供を，また学級全体を方向づけていく大切さを実践記録の中に読みとることができます。子供の実態をおさえ，きめ細かな指導のステップを工夫し，一人ひとりの子供に成就感，よろこびを味合わせる指導はすばらしいと思います。

特に「子供たちは，生来的に本の世界を楽しむ素地を持っているようだ。」「走るようになった時，生活や学習面の変化のみられる時とふしぎと一致する。」という実践に裏づけられた筆者の見方には敬服いたしました。